鳥取城調査研究年報

第10号

2017.3

鳥取市教育委員会

例言

１．本年報は、平成２８年度の史跡鳥取城跡保存整備に係る調査研究の年報である。

２．本報告書に係る調査は、関係機関の協力のもと、鳥取市教育委員会が実施した。

３．本書の執筆・編集は佐々木孝文（鳥取市教育委員会文化財専門員）が担当した。

『鳥府志』にみる近世鳥取城周辺の動・植物

佐々木　孝文

はじめに

近年、史跡としての鳥取城跡の整備を進める中で、近代以前の自然環境も話題にのぼるようになってきた。

既に久松山の自然環境については、鳥取市教育委員会が『史跡鳥取城跡保存管理計画』（昭和 59 年）を策定する際に調査が行われ、その後も鳥取県自然保護課『鳥取県のすぐれた自然』（平成 5 年）や、鳥取市農林水産部『久松山植栽管理計画』（平成 20 年）などの形で調査が行われている。

歴史資料としての鳥取城絵図[1]や遺構の状況から考えると、江戸時代の久松山の自然環境は、全体としてはベースとなる自然林に、中世末～近世の要害構築、城郭整備に伴って伐採された場所や火災で滅失した場所には松などの二次林が加わり、その中に城郭施設が点在しているようなものだったと考えられる。現在の自然環境は、廃城後の公園整備等にともなう植栽や造林による人工林がそれに加わり（二ノ丸や天球丸には桜や梅などの花樹が植林され、昭和に入って後、北側斜面では杉の営林が行われるようになった）、さらに近年のマツクイムシ被害でアカマツが激減し、次第に当初の自然林に林相は近づいてゆきつつあるようである。

このような遷移を経つつも、鳥取城には絶滅危惧種を含めた多数の動植物が生息しており、比較的良好な環境が維持されていると考えられる。

このような大枠の変遷を念頭に、ここでは、もう少し具体的に、近世の鳥取城における、動植物の様相について考えてみたい。

残念ながら、近世において久松山・鳥取城の動植物を総合的に調査した記録はない。しかしながら、近世の鳥取の代表的地誌である岡嶋正義『鳥府志』[2]には、古樹・名木、動物等に関する記述が散見する。そのため、本稿では、『鳥府志』をテキストとして、近世後期の人びとの目に点じた、久松山と鳥取城の自然について考えてみることとしたい。

『鳥府志』の書誌的・文献的位置づけについては、本稿では詳述しないが、『地誌』という本史料の性格上、留保すべき点を最初に確認しておく。『鳥府志』において注意が必要なのは、

①著者が実見して執筆した記述

②著者が実見しておらず、聞き取り・考証によって執筆した記述

が並置されている場合が比較的多く、記述の信頼性が時制とリンクしているという点である。いわずもがなであるが、②は①にくらべて信頼度の低い情報と考える必要がある。いずれにせよ、著者岡嶋正義が知り得た範囲での記述であり、事実の確定のためには藩政資料など他の資料との突合が不可欠である。そのため、本稿は、あくまでも岡嶋の記述を通じて、全体像の概要を知るにとどまるものである。

なお、今回検討対象としたのは、『鳥府志』10 巻のうち、城周辺のことを記載した「上巻」の「天」「地」「人」の各巻である。

植物たち

岡嶋正義は、自然、特に古木・名木の類には高い関心を持っていたようで、『鳥府志』には比較的そう

いった記述が多い。城内から山麓部の武家屋敷まで、現存するもの、失われたものについて、かなりの量の記述がみられる。

目についたものを表にまとめてみると、次のとおりである。

番号	名称	場所	概要	存否
1	兜松（マツ）	山上ノ丸走櫓の前	名木として知られていたが、享保５年の石黒火事[3]で焼失した旧樹。幹は空洞となって、山下から見ると兜の形に見えたという。	×
2	けんぽの梨（ケンポナシ[4]）	山上ノ丸天守台際	岡嶋の時代も現存。それほど大木ではないが、山の上にあるのでよく目立ち、城下の人は皆知っている木である。享保期の記録にも出ているが、一旦枯れて小さい若木に戻ったという。岡嶋正義の時代にはこの木が成長して残っていた。	×
3	山椒（サンショウ）	山上ノ丸	通常の山椒と違う樹で、亀井茲矩が朱印船で海外から入手した苗といわれていた。また、仙林寺がここに移されたときに、僧侶が旧地の布勢から山椒を移したものともいう。宝永頃まで現存していたが、享保時代には稚木一株を残して枯死した。この稚木は文化年間まで残り、岡嶋も実見しているが、その後枯死した。	×
4	古松（マツ）	山上ノ丸渡櫓の前	二株あり、享保の石黒火事を免れた旧樹。岡嶋の時代には「女夫松」とも呼ばれていた。	×
5	御旗竿の藪（タケ）	山上ノ丸をやや下りた場所	岡嶋の時代も現存。この場所に生える竹を切りだして旗竿に使用したため、この名称ができた。	△
6	ほてほり松（マツ）	寺坂の下	石黒火事で消滅。にわか雨の時に樵たちが雨宿りできるウロがあるほどの大木だったという。	×
7	せんじょガ藪（雑木）	寺坂	寺坂を登り切った場所の平場の藪。寺院の本堂、あるいは中世城郭の主郭と思われる場所である[5]。岡嶋も実見。	○
8	楯蔵の松（マツ）	楯蔵	石黒火事を免れた松。岡嶋の時代にも現存	×
9	宝蔵の松（マツ）	宝蔵	石黒火事を免れた松。岡嶋の時代にも現存	×
10	枝垂柳（ヤナギ）	城代家老屋敷の柳地蔵	古樹で、幹は人が入っても狭くないほどのウロとなっていた。岡嶋の知る範囲で朽ちて倒れ、稚木を植えついだという。	×

番号	名　　称	場　　所	概　　要	存否
11	旧樹（樹種不明）	兵庫櫓の犬走り	石黒火事で消滅した。岡嶋は実見しておらず、何の樹かは不明といい、本来樹を植える場所ではないが、何か理由があって残されたのではないかと推察している。	×
12	青木の大樹（不明・タブノキか）	青木馬場	天和・貞享の頃は郭の外に当る場所に生えていた。鳥取城の構造の変遷に伴い、書院の庭木となったり、周辺環境は変わっていったが、樹はそのまま残され、青木神社として馬場の中で祀られていた。石黒火事で被災したが、根から芽が出て生きかえり、岡嶋の時代も現存していた。あるいは現在の鳥取県立鳥取西高等学校第１グラウンド端の大樹か。	△
13	桜馬場の桜（サクラ）	桜馬場	池田光政時代に内堀前の道を拡幅し、路肩に桜の木を植えたので桜馬場という名ができた。寛文の末年頃までは桜並木があったと思われ、元禄７、８年頃までは２、３本古木が残っていたという。岡嶋の時代には完全に消滅していた。現代の堀端の桜はこれとは無関係である。	×
14	佐藤の古松（マツ）	学館向かい	学館と、向かいあう武家屋敷（かつて佐藤という武士の屋敷だった）の、往来を挟んだ左右にあった学館の松と同じ様な老松。かつての因幡国府の里程だったといわれていたという。文化年間に火事で被災したが、大事に至らず残っていた。しかし、この場所が御用地となったために、その後、伐採されてしまった。名のある老樹として岡嶋正義は惜しんでいる。	×
15	佐藤の椎の木（シイ）	学館向かい	佐藤の古松と同じ屋敷にあった椎の木。この木は岡嶋正義の頃はそのまま現存していた。	×
16	学館の大松（マツ）	学館	佐藤家の古松と組みをなしていた、学館にあった松の古木。	×
17	米子荒尾家の並松（マツ）	米子荒尾屋敷	米子荒尾家の表門の左右にあった数十株の松の並木。岡嶋は、他に此類無いというわけではないが、長年手入れがよく、木の姿が良く美しいため、他国でも評判になっているという。	×

番号	名　　称	場　　所	概　　要	存否
18	山池田の紅葉（モミジ）	大名小路	書院の前に紅葉の大木があり、石黒火事の名残りで、幹は空洞になって黒ずんでいる。樹高はそれほどでもないが枝は横に広がり、夏に木陰で鎗の稽古ができるほどであるという。岡嶋は実見している。	×
19	荒尾の紅梅（ウメ）	水道谷出口の大名小路	岡嶋の時代の荒尾極人家と矢野家の境界に、紅梅の大樹があった。珍賞するほどの花ではなかったが、城下の人びとは湯山池へのたなご釣りの目印にしていた。文化の火災で焼失し、湯山池も文政年間に干拓されてこの習慣は無くなった。	×
20	大榎（エノキ）	湯所口惣門付近	「榎荒神」という小祠の御神体となっていた樹。享保年間、民衆がご利益があるとして祀り始めたという。薬研堀の内側（御曲輪内）には神社を建てない習わしにより、小祠は長田神社の境内に移されたが、大榎への民衆の信仰は絶えず盛んだったという。天明年間に丑の刻参りの樹となってしまい、年々釘を数多く打たれたため、ついに枯死して、幹だけが寛政年間まで残っていたが朽ち果てた。その後近隣の住民が神社としての体裁をととのえ、郭の内側にある唯一の神社となった。	×
21	神の青木（不明・アオキ[6]ではない）	山下袋町の内堀近く	鳥取城下では比類ない大樹で、神木として祀られ「斧を入れれば祟られる」というが、持ち主は平気で枝払いをしている。	×
22	江崎下の惣門の大榎（エノキ）	江崎下惣門	江崎下の惣門の土手に大榎の旧樹があって、怪異をなすという風説があったというが、岡嶋は近年のことではないので、享保の石黒火事で消滅したのではないかという。	
23	学館の大榎（エノキ）	若桜口惣門内	若桜町惣門の内にあるとても目立つ木で、対して古い樹とは思われないが枝葉が十四、五間もひろがり、往来の道幅の過半を覆うほどもある、珍しい大木だった。岡嶋によれば「近年の火災で焼失した」という。	×

番号	名　　称	場　　所	概　　要	存否
24	香河の松林（マツ）	若桜口惣門南側周辺	岡嶋の時代「香河肥後」の屋敷となっていた場所[7]の後ろ庭にあった森で、その中に権現の小社があった。城下にはあまり他にない森であるが、古老も家人も何のいわれも知らなかったという。岡嶋は、城下に残る最古級の松の森（「是は池田備中公の御時代に植られたるにや」）と評している。	×
25	新蔵の古松（マツ）	新蔵	石黒大火で被災し、幹だけが残っていたが、享保九年に除却したという。この樹の枝葉を拾うと祟られるという俗説があった。一説には、但馬国竹田城主・赤松広秀が切腹した際ここに埋めて、墓標として植えたとも言われていたが、信用できない説であると岡嶋は述べている。	×
26	山伏の松（マツ）	知頭口惣門の内側	木の根から山伏の道具が出土したり、寛文年間の興禅寺初代提宗和尚の悪霊払いの偈文が残るなど、奇怪な伝承をもつ松の老樹で、岡嶋は城下に残る最古の木（「秀吉公来伐の以前より存在せる旧樹」）と考えていた。弘化２年（脱稿後に加筆？）冬に雪の重さで根元から７・８間上で折れてしまった。	×
27	柳蔵の柳（ヤナギ）	柳蔵	柳蔵という蔵の名は、かつて枝垂柳の旧樹があったためにつけられたという。その柳は、池田長吉時代に築かれた「柳堤」という土手に植えられたもののたった一本の生き残りだったという。享保７年の大風で中ほどより折れたため、枝を指し置いて植継したが、残念ながら享保 12 年の帳屋火事で焼失してしまった。	×
28	柳蔵のかわやなぎ（ヤナギ）	柳蔵	岡嶋の時代に、柳蔵の周囲にあった古樹。ただし、上のものとは別の樹である。	×
29	柳蔵の松（マツ）	柳蔵	いわれは分からないが、香河氏の松林同様、池田長吉の時代に城下町造営の目印として植えられたのではないかと岡嶋は推測している。	×

『鳥府志』においては、鳥取城内の庭園（御殿の庭、紅葉御殿の紅葉、三之丸後背面の庭園など）の木についてはほとんど語る所がなく、岡嶋はむしろ要所に見られる古木・名樹の類に着目していることがわかる。

現地も確認してみたが、残念ながら岡嶋正義時代の樹木で現存が確認できるものはほぼ皆無であり、わずかに山上ノ丸の竹と鳥取西高等学校の古木にその可能性が認められる程度であった（藪は現在も藪であるが、同一の植生かどうか確認できない）。

そもそも岡嶋正義が『鳥府志』を脱稿した文政十二年の時点でも、現存していない古木がかなり多いことが分かる。表の番号で1、3、6、11、13、14、19、21、23、24、26は、執筆時点で既に失われていた樹木である。これらの滅失の理由は、単に老朽化したもの、享保あるいは文化の火災で被災したものなど、さまざまであるが、中には14（佐藤の古松）のように開発のために伐採されたもの、20（大榎）のように流行信仰（丑の刻参りのために釘を打たれすぎた）のために枯死したものなど、人為的に滅失したものも含まれている。

一方、岡嶋の時代に現存していた老樹には、石黒火事で被災しなかった8（楯蔵の松）、9（宝蔵の松）、18（山池田の紅葉）のほか、17（荒尾家米子の並松）、21（神の青木）、24（香河の松林）がある。これらはかなり手厚く手入れをされていたようで、17は永年にわたる手入れの結果、他国にも知られるほどの松の並木になっていたといい、また、樹下で鑓の練習ができるほど大きく枝を広げた16は、火災で幹を焼かれたにも関わらず生育している。21は、斧を入れれば祟られるという迷信があるにも関わらず枝打ちをして樹形を健全に保っていたとも思われるし、22は「特にいわれはない」としながらも、池田長吉時代の松林を江戸末まで存続させているという。また、10（柳地蔵の枝垂柳）のように、枯死した後、挿木によって再生されている例もあり、人々の植物への愛着が感じられる。

岡嶋の視点では、城下町造営の歴史とこれら古樹古木の類は実体的にも関連しており、城下町造営に際して築かれた土手や堀、道に関わるであろうという考証も加えられているが、こうして列挙してみると、植物と城下町の人びとの関係性そのものにも惹かれるものがある。

上述のように木陰で鑓の稽古をしたり（18）、湯山池でのたなご釣りを梅の開花を目印に始めたり（19）、雨宿りに巨木のウロを利用したりする（6）ことなど、植物が現代以上に生活に密接に関連していたことを偲ばせる記述である。

全体をみると、松に関する項目が一番多いのが分かるが、それ以上に興味深いのは、松以外の巨木の多くが信仰の対象となっていることだろう。岡嶋は「大榎」の項で、「郭の内側には神社をつくってはならないことになっている」と書いているが、その言葉とは裏腹に、大樹を祀る小祠はかなりの数にのぼっている。

また、山上ノ丸にある樹木については、管理された植栽というより、かつて植えられたものがそのまま残っていたという書きぶりになっている。山椒については、葉の精密なスケッチを残しているほか、県立公文書館所蔵の一本には、同樹のものかと推量される山椒の葉の押し葉が挟み込まれる形で残されている。

動物たち

『鳥府志』には、植物ほどではないが動物に関する記述も散見する。岡嶋正義は『因府歴年大雑集』[8]という別の著作でも、珍しい動物（享保の象や、竹島の海獣など）に触れており、関心は少なからずもっていたと思われる。

植物と同じく、上の天～上の人の巻で動物に関する主な記述をまとめてみると、次表のようになる。

番号	名　　称	場　　所	概　　要
A	山椒魚	山上ノ丸	山上の天守近くにあった「箱井戸」にいた、「トカゲより少し大きく、箱根で山椒魚といって売っているものと同種のようなもの」。少しの間に増減するため、井戸の外と中を行き来しているのではないかと岡嶋は推測している[9]。
B	赤蟹	山上ノ丸	岡嶋は、A と同じく「箱井戸」にたくさん生息しているという。現在も久松山に生息しているサワガニと思われる。
C	外神の蛇	外神	山頂北側の巨石を祀る「外神神社」の祭神は、左大臣藤原時平だったとも、合戦で討ち取られた数十人の首だともいうが、一般には御神体は大蛇だと言われていた。昔から東照宮の禰宜である永江讃岐家が祀っていたという。
D	慶蔵坊狐	久松山	現存する中坂稲荷の祭神で、藩領内の狐の頭領であるという。池田光仲の愛玩していた鴨を食べた狐を罰したり、池田家の使者を務めた霊狐であったという。
E	尾白坊	久松山	尾の先が白い久松山の狐で、慶蔵坊狐の使者。瓦町下屋敷の稲荷の後身とされる「尾白稲荷神社」が、鳥取市栄町に現存している。
F	御殿床下の狐	久松山	池田光仲の時代、二ノ丸御殿の床下で狐が子を産んだりしており、光仲もこの狐に赤飯を与えるなどして可愛がっていたという。
G	久松山の狐	久松山	久松山には狐が多くおり、岡嶋の時代でも、狐が騒ぐのは変事の前触れだといわれていた。
H	青木馬場の狐	青木馬場	藩士の家臣が青木の下で遊んでいた子狐に小石を投げつけて脅したところ、親狐が仕返しにその男を誘い出し、興禅寺に連れて行って、住職の弟子をだまして、男を出家させてしまったという伝説がある。寛永頃の話であるという。
I	大井津の狐	大井津	江戸時代初期にはあった名水の井戸だが、宝暦年間・天明年間に女性が転落して死ぬことがあり、誰も使わなくなって廃絶した。その頃、この井戸の周辺に悪い狐がいて、人をだまして井戸の中に誘い込むという噂があり、人々は大変怖れたという。
J	豚[10]（家猪）	湯所下の惣門周辺	池田光仲が国入りの際に、江戸から豚を持ち帰り、繁殖させるために城下周辺に放し飼いにした。それを無断で殺して食べ、罪に問われた人物の家であるという。
K	青鷺	湯所周辺	岡嶋の時代以前に、鳥取城の内堀で放し飼いにしていた青鷺を密漁して食べたものが罪に問われたので、その住居を鷺の家と呼んだという。

番号	名　　称	場　　所	概　　要
L	化物屋敷の狸	江崎下の惣門周辺	岡嶋の時代には怪異のうわさも無く、藩の駕籠屋敷となっていたが、寛保前後までは化物屋敷として名高かった。噂を確かめようとしたある藩士がこの屋敷に泊まり、怪異の正体である古狸を切捨てて以後、特に何も起こらなくなったという。
M	新蔵の狸	新蔵	古老の話を聞くと、かつて柳蔵に古狸がいて、人をだましたりしていたが、石黒火事の時、蔵の古木のウロに隠れて焼け死に、その後はなにも起きなくなったという。

このうち、最も多く扱われている動物はキツネである。

宮田登などが指摘する[11]ように、山野を切り開いて築造される城下町の新興期にはキツネに対する信仰（稲荷信仰）が流行しやすい傾向がある。そうでなくとも山陰地域は歴史的に狐憑き信仰が盛んな地域であり、特に鳥取県西部から島根県にかけては近代まで弊害が残っていた[12]。

鳥取城下町においても、狐憑きの記録は説話としてだけでなく、史料にも残されている。たとえば、鳥取市本町四丁目の稲荷大明神（現存）は、棟札に残された由緒書によれば、この稲荷は「宝暦９年に長倉義知の病気平癒を願って勧請されたもので、「380 歳のカウソリ」を初めとする高草郡湯谷村の野狐５体を祀ったものであるという[13]。現在は町屋地域で祀られているが、もとは武家屋敷に屋敷神として祀られたもので、憑りついたキツネを病気平癒の為に神に祀り上げたもののようである。現在でも、一町一稲荷ともいわれるほど鳥取城下町には稲荷神社が多く、キツネとの親和性を偲ばせる。

『鳥府志』の今回とりあげた巻においては、①実在のキツネ（G 久松山の狐）　②藩祖池田光仲にまつわる霊獣としてのキツネ（D 慶蔵坊狐・E 尾白狐・F 御殿床下の狐）　③人に災いをもたらす妖怪としてのキツネ（H 青木馬場の狐・Ｉ大井津の狐）　が描かれている。①については、城山にキツネが多くいて、それが騒ぐと異変の前触れであるといわれると記述しているのみだが、これは、キツネ自体はありふれた動物だったからであろう。②は、久松山の主というべき慶蔵坊狐と光仲の関係にまつわる伝説で、国主たる光仲に、山の主である慶蔵坊が服属していることを示している。伊予松山城には「松山騒動八百八狸」で有名な刑部狸という山の主のタヌキの伝説が伝わっているが、鳥取城では慶蔵坊がその地位を占めているといえる。あるいは、姫路城で池田輝政を呪った「刑部明神」のような立場の神が、ここでは池田光仲に服属しているということであろうか。③は、キツネに対して人々が向けていた、城下町の中を駆け回る野生動物に対する親しみと畏怖の気持ちを表すものと考えられる。『万留帳』正保５年正月９日条に、「江戸からキツネの生肝の所望があり、一匹につき米４斗２俵の褒美を懸けて狩らせた」とあり、薬餌かと思われるが、かなり高額の褒美が出ているのも、そのあらわれであろうか。

岡嶋は、実在する動物（A 山椒魚・B 赤蟹・J 豚・K 青鷺）に対しては、客観的に記述するのみである。カスミサンショウウオやサワガニが、江戸時代から生息し続けているのは、現在まで久松山の環境が良く保たれてきたことを物語るともいえよう。また、「ブタを江戸から持ち込んで放牧した」「鳥取城の内堀にはアオサギを放し飼いにしていた」など、旧来周辺にいなかった動物を、藩主が持ち込んだとする伝承も興味深い。これが事実であれば、久松山系に多数出没しているイノシシには、あるいはこの時持ち込まれたブタの血統を伝えるものがいるのかもしれない。しかも、どちらも許可を得ずに食べた者がいて、その

屋敷が岡嶋の時代まで記憶されていたのである。

石黒火事の際に柳蔵のウロで焼け死んでいたり、化物屋敷の庭で武士に切り捨てられたりした伝承があることからみて、城山に生息するキツネ以上に、タヌキは町中に入り込んで生活していたようである。比較的もとの自然環境の残る場所には広いなわばりを必要とするキツネが住み、残飯を含め食糧の豊富な町中にはタヌキが住んでいたということであろうか。城下の人びとがこうした動物たちと生活を共にしていたためか、これは実際のキツネとタヌキの生態に近いように思われる。

おわりに

以上のように、『鳥府志』を素材として、江戸時代の鳥取城をめぐる自然環境を垣間見てみると、次のような状況が分かる。

① 山上ノ丸付近

旗竿に使用する竹が生育しているほか、サンショウやケンポナシなどいわれのある古木が残されていた（サンショウは岡嶋の記憶する範囲で枯死）。サンショウウオやサワガニも生息するなど、現在に近い、久松山頂の豊かな自然の姿が描かれている。兜松、ほてほり松など名のある古松の木がかつてはあったが、享保の石黒火事で焼失したといい、岡嶋正義の時代には夫婦松というものしか残っていなかった。いずれにせよ、山頂の曲輪を築造する時には一旦皆伐されたと考えられるので、サンショウやマツは久松山の当初のものではなく、築城以後のものである。ケンポナシについては、築城以前の自然の植生が再生したものの可能性も考えられるが、いずれも現存しないので検証できない。近代の新聞記事などの記録、あるいは昭和４０年代に山上ノ丸の当時指定範囲外だった部分が整備された際に記録等が残されている可能性もあり、今後さらに検証してみたい。

② 山下ノ丸

ヤナギ、マツ等、築城後に植栽されたと思われる樹があったが、それらとは違い、意図せざる生え方をした広葉樹と思われる大木が兵庫櫓、青木馬場にあった。兵庫櫓のものは、享保大火で焼失したが、なぜ堀端の櫓の前という支障になるような場所に何故この木が残されていたのかは不明であるという。青木馬場の広葉樹（現地付近の現存する樹と同族であればタブノキ）も、周辺で何度も曲輪の造営・改修が行われたにも関わらず、伐採されることなく現地に残され、「青木神社」の神木となっている。いわば、意図して植えた樹と、自然に生えたような樹が混在している状況であるといえよう。

また、江戸時代初めとはいえ、藩主の居所である本丸御殿の床下で出産したり、岡嶋の時代になっても「狐が騒ぐと何か起きる」といわれるなど、キツネが多数生息していたこともわかる。肉食を基本とするキツネが生息できるということは、その食物である小動物も豊富に生息していたということであり、曲輪の中と山中をこれらの動物が比較的盛んに行き来していたのであろう。岡嶋は全体的な林相などには言及していないが、このことからも、鳥取城を含む久松山の自然環境は、動物たちにとっても良好だったのではないかと思われる。

③ 郭内

②であげたような状況は、内堀と薬研堀の間の区域（郭内）ではさらに顕著である。当初なんらかの意図をもって植えられたとされることの多いマツやヤナギに対して、エノキは、そこで自然に生育したもののように記述されている。水の豊かな谷筋や、やせた土地を生育環境とするエノキにとって、

久松山の谷の出口と、埋め立てられた湿地帯の間に位置するこの区域は、成長しやすい場所であったのかも知れない。マツやヤナギがそれ自体としては怪異や祟りをなすような記述がない一方、エノキには神木になったり怪異を為したりするという記述がみられるのは、あるいは人の手で管理しているマツに対して、人の手の及ばない部分があるエノキに神秘性を感じる者が少なくなかったではないだろうか。ウメ、モミジなどのように色合いの美しいもの、香河家のマツの林のように池田長吉時代からの城下町造営の歴史を語るもののほか、米子荒尾家のマツの並木のように、手入れの行き届いた植栽もあった。堀端の馬場のサクラの並木のように、江戸時代初めに植えられ、自然消滅してしまったものもある。

一方、人口が城の内より多いためか、『鳥府志』はキツネにかわってタヌキに言及している。武家屋敷や新蔵の古木のウロに住み着くなど、キツネに比べて人間の生活に近い場所で暮らしている姿は、現代でも時折みることができる。キツネについてはやや凄惨ともとれるような伝説が記されているのに対して、タヌキについては、人をだましたりおどしたりと、少し愛嬌のある記述となっている（もっとも、タヌキも切り殺されたり焼け死んだりしている）。

これら全体を通してみると、やはり享保５年の石黒火事をはじめとする城下町の大火災の影響は少なくなく、特に石黒火事は目印となるような名木に大きな被害を与えて、ある意味それ以前とそれ以後を区画する指標となっているようである。

久松山鳥取城は現在と同様都市近郊の豊かな自然を保持していたが、特に享保大火以前は、鳥取城・城下町造営以前の自然環境に属する樹木と、造営に伴って植栽された樹木とが併存し、それぞれに特有の景観等を形成していた。特に前者は、信仰や畏れの対象となっていたようである。

同じように、キツネやタヌキはある程度生活空間を共有する存在として、親しみと畏れが混在するような記述になっている。どちらかといえばキツネは畏れの方が強く、タヌキは親しみの方が強い印象を受ける。サンショウウオやサワガニ、ブタやアオサギについての素っ気ない書きぶりとは対照的である。

度重なる火事による焼失、城下町の発展による環境の変化を経た岡嶋正義の時代には、このような自然と人の関係は、城下町の人びとから薄れつつあったのかもしれない。城下町と異なり、永続する藩主の象徴として変化が少なかったであろう久松山・鳥取城においてさえ、享保５年の大火前と大火後では、名のある木の多くが失われている。

いうまでもなく現代では、岡嶋の記した木でさえ、明確に確認できるものはほぼ皆無である。一方で、サンショウウオやサワガニだけでなく、キツネやタヌキ、アオサギ、あるいは放牧されたブタの血統をひく可能性もあるイノシシなどの動物は、かつてほどの親しみはないが今でも鳥取城周辺で姿を見ることができ、全体としての久松山の環境は、時代ごとに変遷はあるといいながら、ある程度保全されているといえるだろう。

現在、鳥取城跡については、幕末期の姿に城郭施設を復元する整備を行っている。これらの復元整備との関係において、動物・植物のありようも、あるいは今後さらに具体的に把握する必要があるのかもしれない。

[1] 鳥取県立博物館『鳥取城絵図集』（鳥取県立博物館資料刊行会、1998）に、現存する城絵図の大部分は掲載されている。

[2]『鳥府志』（文政 11 年）は、『因幡民談記』『因幡志』とともに近世因幡を代表する地誌で、鳥取藩士岡嶋正義の著。本稿では『鳥取県史』近世資料 6（1974）に掲載されている翻刻を史料として使用した。翻刻の底本となった原本は鳥取県立公文書館に所蔵されている。

[3] 享保５年の「石黒火事」では、楯蔵など少数を除き、鳥取城内の主要な建物がすべて焼失した。幕末まで存続した建造物の多くは、この後再建されたものである。

[4] ケンポナシは、小さな実が数多くなる木で、実のつく軸部分が食べられる。鳥取市内の山林には、現在も自生している。一般的なナシとは別の種である。

[5] 「寺坂」は、鳥取城の登城路のひとつである水道谷からの道沿いにあり、天神山にあった「仙林寺」が移転した地とも考えられている。参道両脇に塔頭と思われる平坦地が連なり、参道突き当りには本堂所在地と思われる平坦地と井戸がある。中世城郭としても使用された可能性があり、揚羽蝶紋の軒丸瓦が表採されたことから、江戸時代にも何らかの施設があったものと考えられる（西尾孝昌「平成 19 年度調査の概要」、『鳥取城調査研究年報』第１号、2008）。

[6] アオキと呼ばれているものは、常緑広葉樹のタブノキの仲間か。岡嶋は、柳、松、榎以外の樹種については、あまり区別していないようである。柳、松は城下町の造成に関わる人為的な植栽、榎はそれ以前の原地形に関わるものあるいは自生する樹木の、それぞれ象徴的なものと捉えているように思われる。

[7] 香河家のマツ林は、薬研掘の旧河道に面しており、現在の日本赤十字病院鳥取病院から鳥取市役所本庁舎にかけての場所がこれにあたる。

[8] 『因府歴年大雑集』の成立年代は未詳だが、地誌である『鳥府志』と、歴史書である『因府年表』の下敷きとなった資料をまとめた内容となっている。

[9] 久松山では、この種の動物として「カスミサンショウウオ」が確認されている。絶滅危惧Ⅱ類に分類される小型のサンショウウオで、近年も隣接する樗谿公園で生息が確認されている（『レッドデータブックとっとり』改訂版、2012）。

[10] 「家猪」という言葉は『日葡辞書』にも見られるが、当時の日本人は家畜はあまり食用にしなかったといわれており、珍しい事例である。ブタやアオサギを「放し飼い」にしたのは、野生のものを獲って食べることが、家畜を食べるよりは抵抗感がなかったとされる、当時の社会通念によるものだろうか。

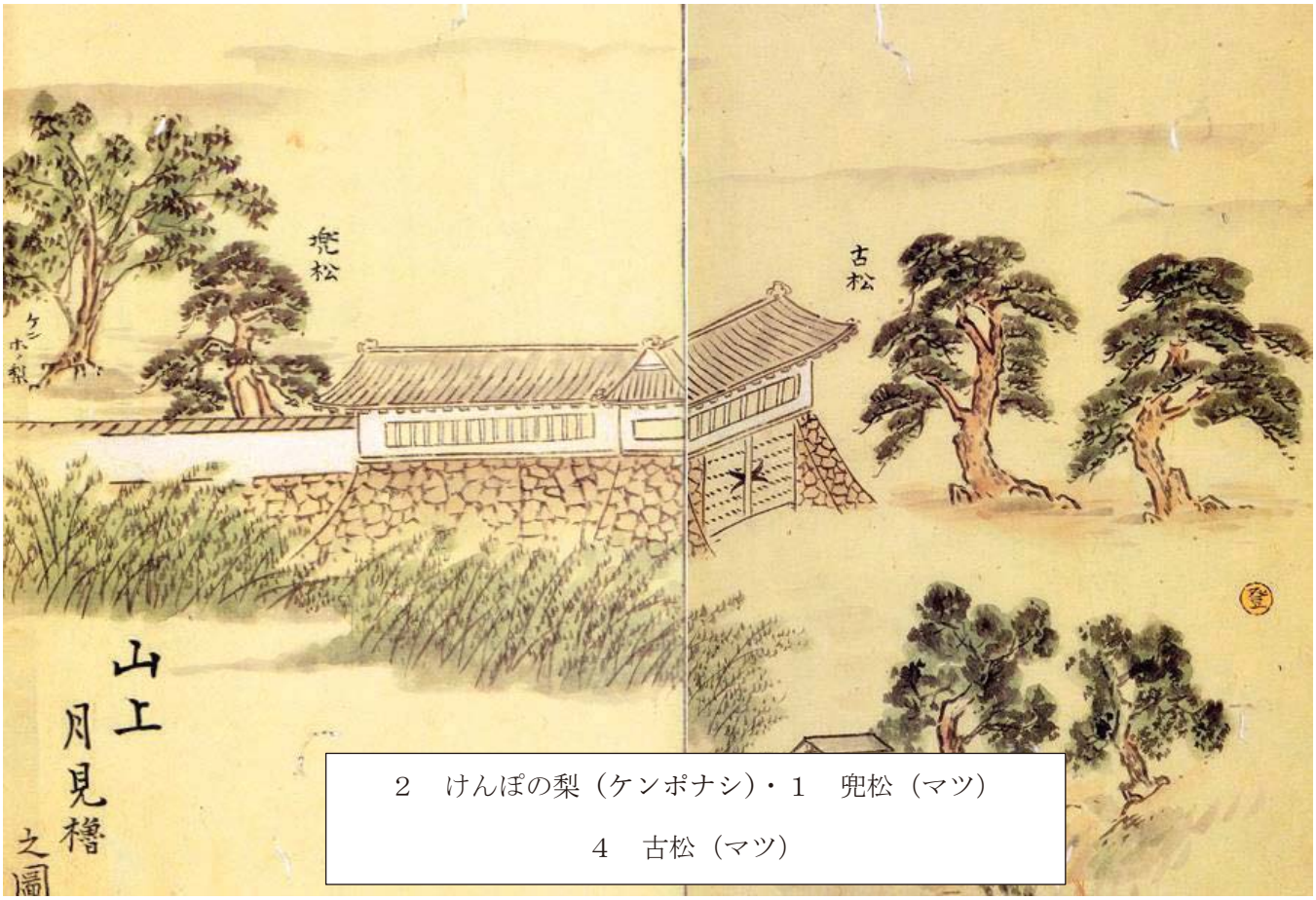
[11] 宮田登『江戸の小さな神々』（青土社、1989）など参照。

[12] 速水保孝『つきもの持ち迷信の歴史的考察　狐持ちの家に生まれて』（伯林書房、1953）など。藩政資料にも狐憑きの事例は散見する。

[13] 拙稿「本町四丁目稲荷大明神資料について」（『鳥取地域史研究』4 号・2002）

『鳥府志』に描かれた樹木

（画像は鳥取県立公文書館『鳥府志図録』〔1994〕より転載）



2　けんぽの梨（ケンポナシ）・1　兜松（マツ）

4　古松（マツ）

3　山椒（サンショウ）

1　兜松（マツ）

『鳥府志』に描かれた樹木

（画像は鳥取県立公文書館『鳥府志図録』〔1994〕より転載）

6　ほてほり松（マツ）

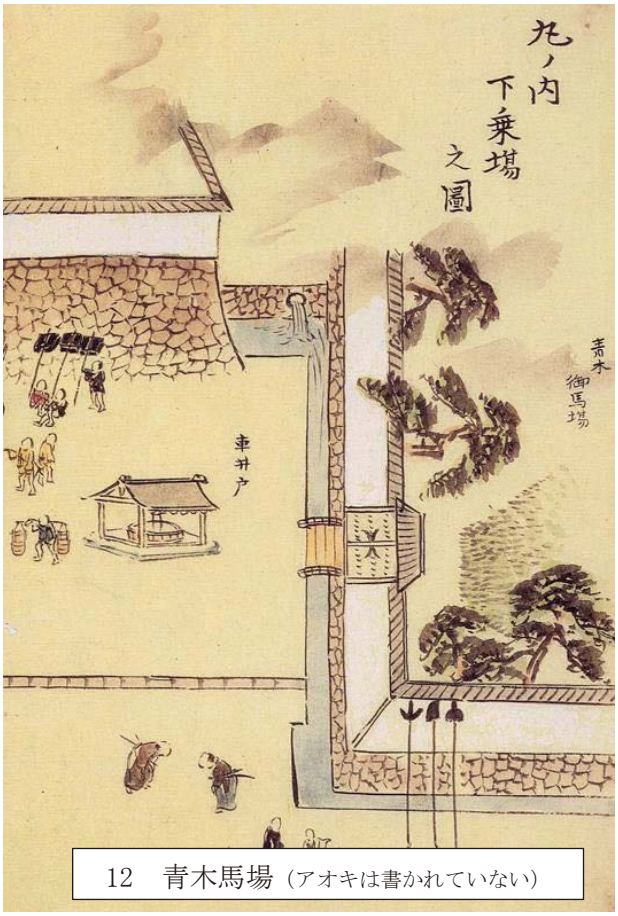
9　宝蔵の松（マツ）

10　枝垂柳（ヤナギ）

11　旧樹（樹種不明）

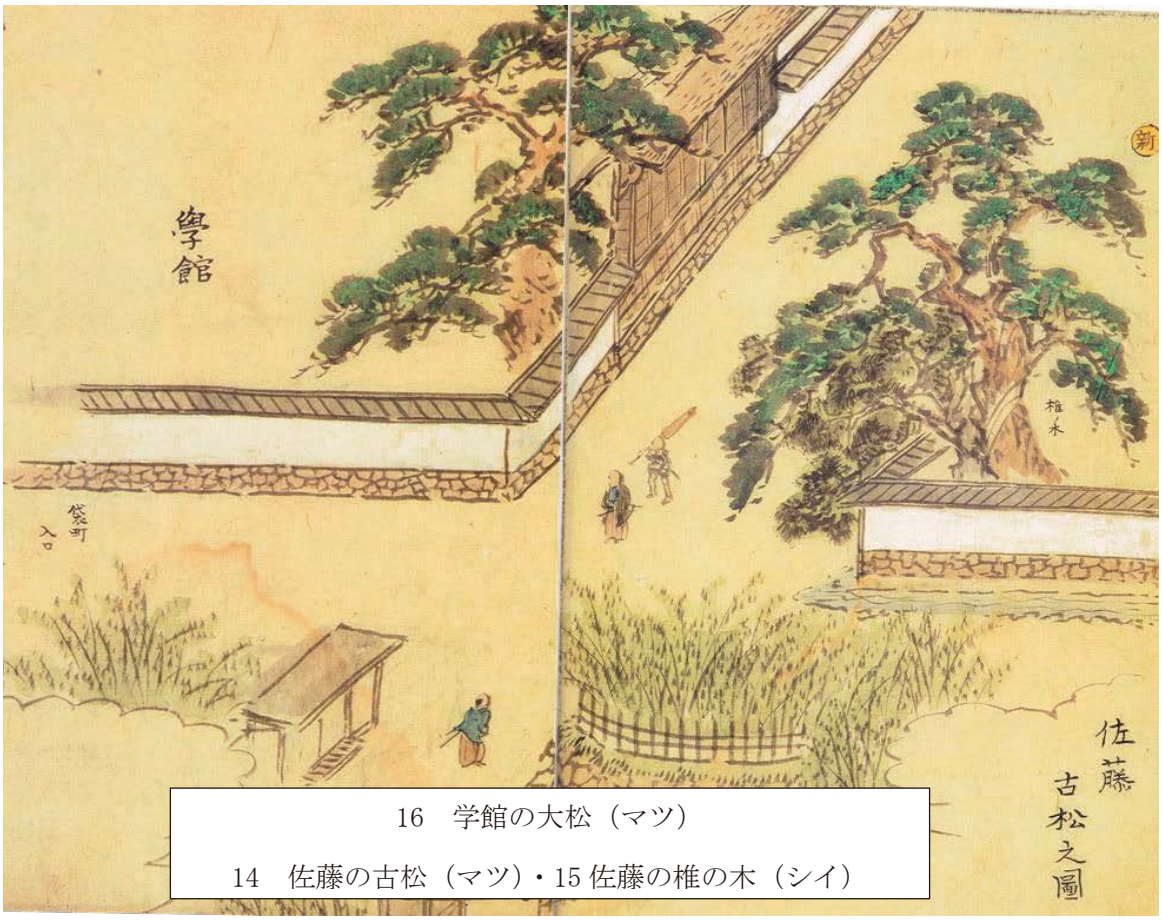
『鳥府志』に描かれた樹木

（画像は鳥取県立公文書館『鳥府志図録』〔1994〕より転載）



12　青木馬場（アオキは書かれていない）

13　桜馬場の桜（サクラ）



16　学館の大松（マツ）

14　佐藤の古松（マツ）・15 佐藤の椎の木（シイ）

『鳥府志』に描かれた樹木

（画像は鳥取県立公文書館『鳥府志図録』〔1994〕より転載）

20　大榎（エノキ）

23　学館の大榎（エノキ）

21　神の青木・24　香河の松林（マツ）

『鳥府志』に描かれた樹木

（画像は鳥取県立公文書館『鳥府志図録』〔1994〕より転載）

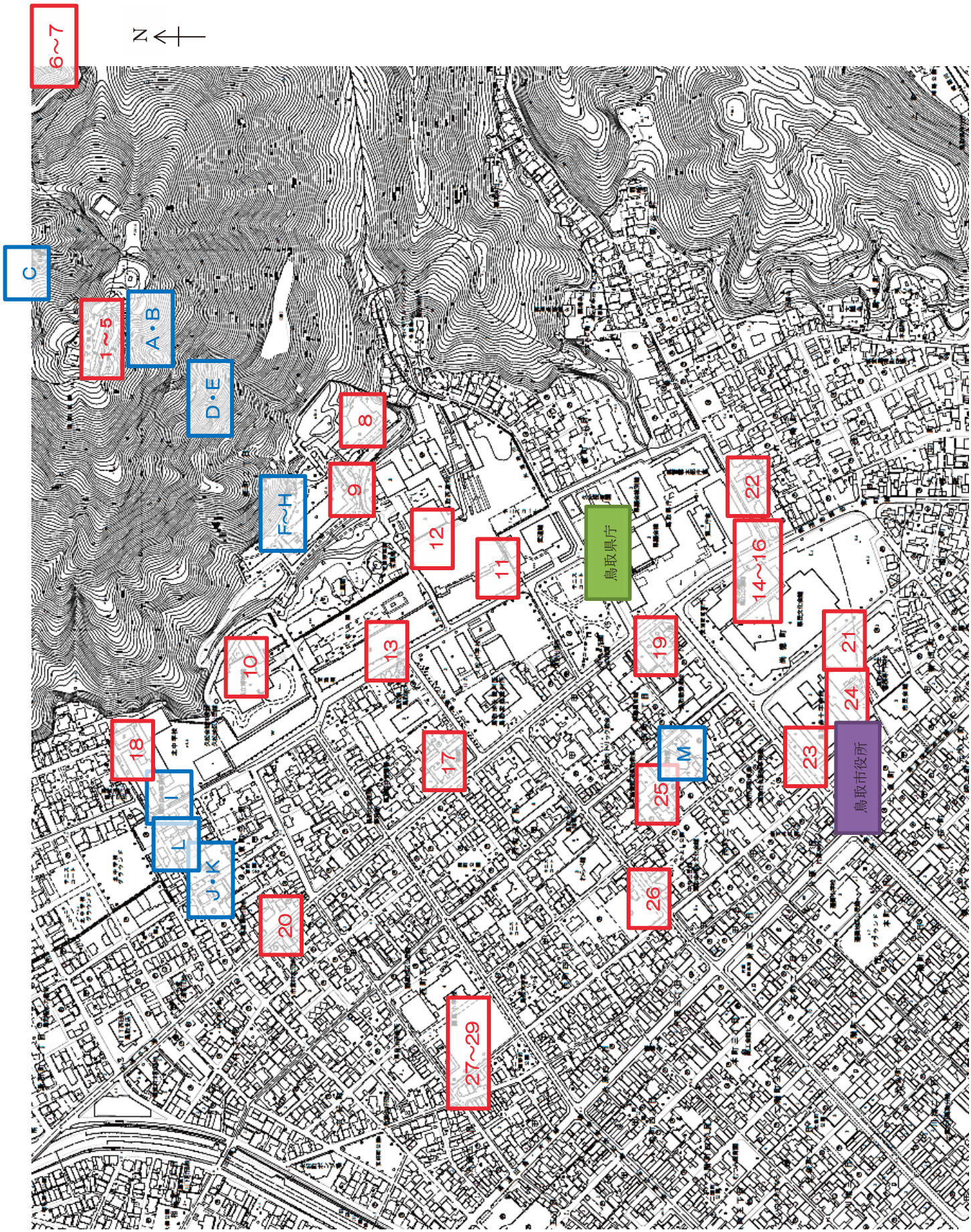
19　荒尾の紅梅（ウメ）

25　新蔵の古松（マツ）

26　山伏の松（マツ）

27　柳蔵の柳（ヤナギ）

『鳥府志』上巻　動・植物記述マップ



執筆者
佐々木　孝　文（鳥取市教育委員会）

鳥取城調査研究年報　第10号
印刷・発行　平成29年3月31日
編集・発行　鳥取市教育委員会
印　　刷　日ノ丸印刷株式会社